「追放後のモリスコ（北アフリカを中心として）」

報告者　愛場百合子

今回の、追放後のモリスコについての発表では、モリスコが移住した地域の中でも、特に多数のモリスコが移住したと考えられる北アフリカの三つの地域、モロッコ、アルジェリア、チュニジアを中心に話をすることにした。

追放後のモリスコについて説明する前に、まず、モリスコ研究の中でこの分野がどのように位置づけられるかをまとめた。従来のモリスコ研究のほとんどは追放前の、つまりイベリア半島におけるモリスコに関するもので占められていたが、近年になって追放後のモリスコに関する研究は欧米の研究者およびアラブ世界の研究者双方の協力により、著しい発展を続けている。参考として、主な研究者、主要な研究機関、雑誌を紹介しておいた。

次に、モリスコ追放の歴史を概観した。追放は 1609 年から 1614 年にかけて行われ、およそ 30 万人のモリスコがイベリア半島を離れたと考えられている。バレンシアのモリスコが Oran に向けて出航し、その後アンダルシア、カスティーリャ、アラゴン、ムルシアなど、スペイン各地のモリスコが陸路フランスを経由してトルコへ、または海路、北アフリカやエジプトなどへ移住したのである。

さて、モロッコは、当時、他のマグリブ地域とは異なり、地中海に勢力を拡大していたオスマントルコの脅威、さらにポルトガルやスペインの脅威に脅かされながらも独立を保持していた。追放令の後にモロッコに移住した大勢のモリスコはスペイン文化の深い影響を受けていたため、それ以前に半島から間断なく海を渡って来ていたムスリムが比較的緩やかにモロッコ社会に同化したのに対し、モロッコの社会組織に大きな変化を及ぼしたとされる。代表的なモリスコの町としては、Sale・Rabat と Tetuan が挙げられる。この 2 つの港町は、当初モリスコが自分たちのための独自の社会構造を形成するために政治的な自立を実現させたが、その後、既存の構造に順応させざるを得なくなった。これらの町には、主として Hornachos や Extremadura のモリスコが移住している。移住した最初のモリスコはアラビア語を知らなかったとしても、徐々に口語、俗アラビア語を使用し、ムスリム社会に順応していったと考えられる。一方では、モリスコの中にはスペイン風の苗字を現代に至るまで保持している者も少なくない。

モロッコと同様にアルジェリアにおいても、モリスコ追放以前から、すでに数多くのムスリムたちが移住していた。当時オスマントルコ領となっていたアルジェリアは、キリスト教徒との戦いに備えて移住者たちを受け入れていたと考えられる。追放されたモリスコが到来した町には、まず Oran がある。ここにはスペインの要塞があったために、そこから Fez、Tlemecen への移住が試みられた。モリスコが定住した地域は、Alger、Tlemecen など、トルコの支配の及ぶ地域で、トルコと敵対関係にあった山岳部の部族の住む地域や、スペインと同盟関係にあるような地域には定住していない。また、モ

リスコが作ったすばらしい農園で有名なMitidjaや、モリスコが廃墟から復興を果たしたCherchelの町がある。モリスコは農業、手工業に従事し、また、海賊行為や奴隷貿易に関与していたという記録もある。アルジェリアに移住したモリスコは、バレンシア出身の者が多かったため、イスラム社会への同化、言語の習得に多くの時間を要することはなかっただろうと考えられる。

チュニジアへのモリスコの移住は、上記のモロッコやアルジェリアの場合と異なり、17 世紀とそれ以降に集中している。この時、約8万人のモリスコが到着したとされる。多数の、しかもスペイン文化の強い影響を受け、アラビア語もほとんど使用できないモリスコのこの地への同化は困難であった。そのため、チュニジアのモリスコ共同体は、今日までその特異性を保持していると考えられる。主なモリスコの町としては、Tunez、Bizerta、その郊外の町 Hawmat-al-Andalus（アンダルシアの人たちの地区）などがある。チュニジアへ逃れてきたモリスコの多くは、カスティーリャ、アラゴン、カタルーニャの者であった。彼らは、移住後もしばらくの間スペイン語を話していたという記録も残っており、また、スペイン的な名前を保持するものも少なくなく、現在に至っている。

以上、北アフリカの三つの地域について見てきたが、モリスコの移住先として、他には、イスラム圏の諸地域、バルカン、アナトリア、エジプト、シリア、リビアなど、また、フランスやイタリア、さらにはカナリア諸島や中南米などもあることを付言した。

最後に、追放後のモリスコに関する今後の課題としていくつかの点を指摘した。まず、北アフリカにおけるモリスコに関しては、17 世紀およびそれ以降の同時代人による当時のマグリブ社会の記録が多く残されているので、それらを整理してまとめ、モリスコたちの実態を知る資料としてさらに活用していくことができるだろう。同時代人としては、例えば、Al-Maqqari, Diego de Haedo, Francisco Ximenez、Show、Venture du Paradis などがモリスコについて言及している。また、北アフリカのモリスコについて、特にその軌跡、影響について考える場合、マグリブ世界はイベリア半島と距離的に非常に近い位置にあり、また地中海貿易においても交流が盛んで、イベリア半島のムスリムやキリスト教徒とマグリブ社会の者との接触は常に行われていたため、マグリブ世界に見られるさまざまな痕跡をモリスコの影響として特定すること、どの時代の影響なのかを特定することは非常に困難であると言わなければならないだろう。また、北アフリカ以外の地域のモリスコに関して、近年、多岐にわたる研究が精力的に行われており、それらの研究についても十分に検討していく必要があるだろう。